

東寮・旧体育館に関する懇談会（第1回）

2006年11月10日於本館理事長室 13:00～14:45

大学側：原田明夫理事長、湊晶子学長、堀地史郎常務理事、桃井明男事務局長
東女レーモンドの会：永井路子（発起人・44年国専）、藤原房子（代表・53年文社）、田邊道子（事務局・66年文社）、堀江優子（83年文史）

*和やかに自己紹介をすませると、湊学長の祈りで始まり、それから懇談に入りました。

<署名簿の提出>

藤原 以前（本年7月10日）私と田邊さんとでお訪ねした折は、「卒業生有志の会」の代表として参りました。その後、東寮と旧体育館の保存活用を望む同窓生はもちろん、建築関係の方とも連携して組織を広げ、25人の発起人の下に「東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会（略称、東女レーモンドの会）を発足させました。ですから、この会としての会見は今日が初めてということになります。

東女レーモンドの会では、趣意書と署名用紙を作成して、9月13日から署名運動を始めました。そして一昨日（11月8日）までに集まった署名を1冊に綴じまして、ここにお持ちしました。短期間でしたが、全部で7077名もの署名が集まっております。どうぞご覧下さい。このうち手書きの署名は6719名、358名はインターネットを通じて集まった電子署名です。署名なされた方々の内訳としては、国内外の卒業生と、その周辺の方々、また建築関係の方々からも多くの署名をいただきました。

それからこちらは、インターネットによる電子署名の折に寄せられたコメントを抄録したものです（事務局に寄せられた手紙も含まれております）。手書きの署名の場合は、そうした欄はありませんが、電子署名の場合は自由にコメントを書き添えられる形式になっておりますので、多くの切実な声が寄せられました。ぜひお読みになっていただきたいと存じます。さらにこの手紙は、アメリカの日本大使館員から寄せられたものです。レーモンド建築の関心は日本だけのものではありません。こちらもお渡しいたします。お目通しくださいますよう。

なお、東女レーモンドの会は九月に発足し、発起人は25名を数えますが、その中には本学名誉教授も数名含まれております。こちらが趣意書と発起人名です。どうぞご覧ください。

*ここから理事長の許可を得て、テープに録音を始める。

<大学側の説明が会の活動に反映されていない>

藤原 本日お目にかかるということ、皆さんにお知らせしたら、聞いてほしいことをいろいろ言いつかりまして、それをワープロで一覧表を作って持って参りました。これを見ながら申し上げたいと存じます。

桃井 テープに取ることは結構ですが、記録を公表する時には事前に見せてください。それを書き直すことはありませんが、明らかに間違えている部分のご指摘はさせていただきたいので。

藤原 言い間違いというのは誰にでもありますね。

永井 そちら様でこうした記録をどこかに公表なさる御予定はありませんか。

原田 ありません。この間、お会いした時に あの時は個人の資格でお会いしたのでしょうけれど いろいろ申し上げたのですが、それが皆さんの要望の中に、一切反映されていないのです。

藤原 具体的にどういうことでしょうか。皆さんにお話しはしてありますが、反映とは。

原田 反映されていませんよね、この趣旨とかにも。

藤原 申し上げますけれど、それでもなおかつ納得できないということでは。

原田 こういうことで納得できないということをお書きになれば、またよろしいですが。

藤原 ですから、本日、そのことでの疑問点をお持ちしているわけです。

桃井 こちらとしてはいろいろ嘆願、要望書をいただいて、それに対して理事長、あるいは学長名で返答をしているのです。皆様方がいろいろな形で出しているものの中に、こちらが返答をしている部分が見当たらないものですから。

藤原 私宛てにくださいましたか。7月31日付のお手紙はいただきましたが、それ以外に頂戴していますか。

桃井 他の方々から大学の方へ要望書のようなものをいただいているのです。私どもは個別にお返事を申し上げているのですが、それらのことが、皆様方のやり取りの中に反映されていない。大学がまったく対応していないような感じで、こちらが対応している痕跡がまったく見られないということがあって…。

原田 そのことを学生や教職員が大変心配しているのです。これまで長い経緯があり、大変な努力をして、ここまでに至っているわけです。始まる前に申し訳ないけれど、私は立場上、一言いかなければならないことがあります。レーモンドさんの設計については、全体のキャンパス計画を始める最初から大変に意識して、それをどう活かすかということは、当初から考えています。しかし、この大学が始まった時は400人から始まっているのです。ある程度大きくなった時にも、恐らく2000人までいっていなかったのではないのでしょうか（注1）。その後、建て増しで建物が増えてくる中で、大変苦労して来ているわけです。

そして老朽化。82年も経てばそういうことも起こりますね。特にレーモンドに建てていただいたものに、大変老朽化が出ている。しかし、レーモンド建築の9つのうち、今回の全体の計画では、歴史ゾーンとして7つの建築物を最も残さなければいけないと考えています。最もと言うと語弊がありますね。東寮のことを考えていないと。しかしこの大学が残すべき文化財として、当時の大学当局が申請をして保護していただくことになって、それは今回の長い計画の中で着実に活かされている。それを一つ一つ修理して、これからを使っていただくことは並大抵でない努力をして、お金もかけて、さまざまな人のご意見も聞きながらやって来ているわけです。そういう努力の過程があるのに、9つのレーモンド建築をそのまま維持することが大事だということから始まっている運動です。

しかし、私ども大学関係者はこれだけ努力を重ねてやってきた足跡がある。それに対して大学当局も順序を経て、評議員会とか、理事会と意見を交換しながら、教職員の意見を聞きながらやってきた。そして最終的に今、善福寺全体として将来に向けて、これからの100年、200年と続く本学をいろいろな立場から考えていこうということで、全体的には歴史的ゾーンとして整理していきましょうと。

それから現在、将来の学生、教職員の安全確保です。今は老朽化して大変なのです。例えば冷暖房設備が壊れたり、床が持ち上がったたり…。

田邊 前回伺いました。

原田 それが全然出ていない。

藤原 それは伝わっております、紙には書いていないだけで。

原田 そこが問題なのです。大学がやっていることに対して、どういう評価をしているのかということが…。

永井 もちろん、それは承っております。が、それが全てで固まっているのではなくて、新しい考えも先生や理事長様に聞いていただいて、そこで何かができないだろうかという話し合いをさせていただくということです。学校の中でのご努力、これはどこの学校でもやっておりますけれど、もう一つ違った面もここでお考えになっていただければ、新しい面がそこに出てくるのではないのでしょうか。そういうお願いでございますので、別にそれに絶対反対をしているというわけではありません。こういうよいチャンスができましたので、私どもの考えも入れていただきたい。この前の会見も門前払いではなかったのですね。聞くに値しないということではなくて。

原田 それはありませんよ。皆さんが育てられてきた思いはヒシヒシとわかります。大事に思っていることは、私は本当にわかる。しかし現在、将来の学生の安全を図っていく、利便を図っていく。この大学として素晴らしい過去を活かしつつ、しかし新しい皮袋にして、この大学を育てなければならない。

永井 隅谷先生もそういうことを、前におっしゃいました。が、その時点の考え方と今とでは、やはり時代が違うということ。やはり世の中でも、そういうことに対する関心が高まっています。

この前の会見でも、聞くに値しない門前払いではなく、「聞き置く」と言っていたことは、私どもとしても大変ありがたいことです。そしてその先、「理解をする」という段階を入れていただけないかと。

原田 「聞き置く」と言ったつもりはないので、「聞き置く」というのは、聞いて置いておくわけですね。私はよく理解しました。しかしそれらについて、私が申し上げているのは、私のみならず皆さん、考えに考えて現在の設計を作っているということも…。

永井 もちろん、それは私どももわかります。他の大学でも、大学がいいようにということでお考えだと思います。が、またこの時点で「聞く耳もたぬ」ではなく「聞き置く」というのは、やはりありがたいことです。さらに「理解をする」という政治用語がありますが、例えばもう一歩でも半歩でも、進めて考えていただく場にできないものだろうか。お気持ちはよくわかります。女子大のため、学生のためということですが、私どもも同じく女子大を愛しています。そしてただの感傷ではなく、女子教育の歴史の中で大きな意味を持つ東京女子大でございますから、その

新渡戸先生のスピリットを何かの形で、残せないものだろうかという気持ちがございます。絶対にということで座り込みするとか、そういうことでなく、少しずつお話を進めて、それに対する理解をしてくださるところまで、お話がいきますと、これは大変和やかにいって、ありがたいことだと思います。

<会の要望は大学側に伝わっているのか>

藤原 それは相互の働きなのですよ。だから私どもの文書に、そちらの話したことが出ていないとおっしゃると同様に、私どもの申し上げたことが理事会で取り上げられたのでしょうか。こういうことを言って来ている卒業生がいて困るけど、どうしたものだろうという話し合いがなされたのかどうか。私どもには、本当に聞き置かれるだけという失望感もございます。

堀地 そのことについて事実関係だけを申し上げますと、7月にご提案いただいて、我々の考え方をご説明しましたね。その後、名前を変えて活動している動きについては、理事会、評議委員会に全部ご報告してあります。それに対して、我々がどういうふうに対応したかと、そういうことは全部ご報告してあるのです。

藤原 どこから情報をお取りになりましたか。私自身は報告していなかったもので、アレっと思ったのですが...

堀地 その情報は、たくさん資料をいただいてきましたから。

藤原 私が申し上げましたか。

原田 お話は、藤原さんだけではなく、他のいろいろな卒業生から寄せられるのです。それに対して大学当局は、本当に丁寧な...。この間、堀江さんからいただいたものには、私はお返事していませんが、これは学長とか皆さんにも来たので。それは全部が全部対応するのではなくて、今までの歴史を頭に入れてご理解いただけるように、その点はもう少しご説明した方がよいという点はやるようにして来ています。

藤原 高月さんにもお電話でずいぶんお話ししましたからね。

堀地 電話で局長宛てにご要望があることとか、それに対して我々がどう考えているかということも、全部報告を受けております。例えば、この7077名の要望書は、大学の意見はこうで、我々がそれに対してどうと、そういうことをちゃんと踏まえた上で署名していらっしゃるかどうかです。そういう問題が、何か考える時には必要ですね。守りたいという気持ちはよくわかりますが、一方的な情報だけで判断されては、具体的な解決にならないと思うのです。

湊 大学の方の対応というのは、両教授会がございまして、その上に理事会との間に大学評議会というのがあります。私は大学評議会が7月7日から現在に至るまでの要望書であるとか、そうしたものを全部お見せして、ここまで対応していますということをご報告しています。

永井 それを全部、私どもも見せていただくとよいですね。

堀地 それはお見せしてもよろしいですよ。それは事実ですから。特に理事長の名前で大学がどう考えているかということ...。つまり、保存という問題を踏まえた上で、全体として、経営として、どういうふうに対応しなければいけないかというところが大学の判断基準なのです。ですから、そういう立場もわかっていただかないと、一面だけをおっしゃってもなかなか見合わな

いところが出てきてしまう。

藤原 財政事情とか、私どもが知らない情報はたくさんあると思います。それは十分承知の上で申し上げているつもりです。

< 歴史的ゾーン ・文化財指定 >

藤原 ただ事実認識として、先ほど「歴史的ゾーン」とおっしゃいましたが、もし歴史的ゾーンというならば、東寮と体育館は最も初期に建ったものですから、最も歴史的に存在価値の高い建物ではないですか。この本館よりも早いのですから。

永井 定礎がちゃんとあるのですね。私も初めて聞いたのですが、1922年と。震災前ですからね。

藤原 そういうものがなぜ「歴史的ゾーン」の中からオミットされたかというのが、わからない。

原田 文化財に指定されたことですね。この前、皆さんは、大学当局が文化財として指定する時に、寮を含めて指定しなかったことは非常に意図的だと、ご指摘された。意図的にそうしたのだと。

藤原 新聞記者の報道が正しいのかどうか存じませんが、私は新聞記事を見てびっくりしました。初めから土地が必要だと、だからあそこを利用するべきと土地として外したということ、事務局長がおっしゃったと記事に出ていました（注2）。

田邊 毎日新聞に出ていました。

湊 私も新聞で見ました。

藤原 私はあれをみてびっくりしました。外されたことは別としましても、もしも後でそれに気付いたら…。

原田 その外されたというのは、当時出たのですか。

藤原 いいえ、この件が起きた時に。

原田 文化財に指定されたということは、当時は報道されていないのですか。

藤原 本館、その他が指定されたということは新聞に出ました。

原田 卒業生の方はあまりそういうことに関心がなかった…。

藤原 記事は見ました。その時に私は、当然9棟を全部一括指定されたのだと思いました。

原田 調べたのですか。

藤原 調べません。

原田 どうしてですか。

藤原 記事には、東京女子大学のレーモンド建築が文化財に指定されたとしか書いてありませんでしたから。そんなふうに差がつけられているとは知りませんでした。おめでたいと言えば、おめでたいですね。

永井 でも、それはこれから申請することも可能ではないでしょうか。

原田 それはそうかもしれませんが。しかし当時、そこから外されたということは、私などは関知しない時代の話です。その時に皆さんの中で、おかしいじゃないかという反論がなかったので

すね。

藤原 それの記事に書かれていなかったのです。9棟のうち7棟のみとは書いていなかった。新聞記事は、あまり細かいことは書きませんでしょ。私は自分が情報発信者だったから、わかります。

原田 その話は水掛け論ですけど、大事な話ですよ。

永井 今からでも遅くはございませんから。

堀地 大学の中にもいろいろ情報がありますが、7つを申請することを理事会で諮っているのです。なぜそうしたかというところまで、詳しくはありません。これは私の推測ですけど、ここは建物がまとまってありますよね。ここを我々は「シンボルゾーン」と呼んでいるのです。

藤原 でも安井記念館やライシャワー館はまとまってはありません、散らばって存在しますよ。

堀地 ここの部分を言っているのです。ここが正面です。門を入れて、本館、東校舎、西校舎、講堂・礼拝堂。ここの部分をユニバーシティ・シンボルゾーンと。こういう区分けをゾーニングというのですね。ここの部分は大学のシンボルです。これは一号館を除いて、全部文化財ですよ。それから、ここがメモリアル・フォレストゾーン。これがライシャワー館です。ここの地区をそのように考えているのです。ところが東寮と体育館は、このゾーンから確かに外れているのですよ。全部を保存するというのは、やはり実際的には無理だと思います。

藤原 堀地さんもお記憶と思いますが、前回お目にかかった時に、「なぜ7棟だけを申請することになったのでしょうか。その時の理事会のやり取りの事情、その他をおわかりでしたら教えて下さい」と、宿題としてお願い申し上げました。そうしたら結局、「わかりません」というお返事が来たのです。ですから、その辺が曖昧に 隠されていると言ってしまうと語弊がありますが 知らされていないので、私たちとしては透明性に欠けると...

堀地 我々はその時にいないのです。

藤原 ですけど、記録はありますでしょう。

堀地 だから記録を調べたところ、なぜそうしたかということまでは書いていないのだけれど、推測するにそういうことであろうと。その考え方は、今でも非常に賢明な考え方だと思います。というのは、ここも保存しなさいと言われたら、大学を整備することが非常に難しいです。ですから私は、そのところが記録には明確に書いてありませんけれど、そういうことをよく考えた上で決めたのだと。

藤原 なぜ2つが外れたかの理由を知りたいことと同時に、それを拡大して新しいビルを建てなければ教室不足だとか、スペース上問題あるのだとおっしゃいましたけれど、今は人口減の時代に入っています。学生数が増えるかどうかということは、今だってかなり頭の痛いことだと思いますが、将来にわたって学生が増えていくかどうかの見通しがはっきりしないままに、そういうスペースを作っていくことが果たして賢明なのかどうか。そのことも併せてお尋ねしているのです。それについての適切なお答えはいただいていません。

堀地 私は堀江さんに個人的にお手紙を出しました。仰るように、そんな大きな投資をして、学生がだんだんと減っては困るじゃないか、そういうリスクがあるじゃないかというご指摘については、本学のキャンパス計画を作る時に十分に考えました。さらに人数を増やすということは、

この少子化の時代に大変難しいと思うのです。ですから、最低現状維持。これを前提に整備計画を考えています。そのためには、その土地は必要なのです。

< 新渡戸稲造の精神を伝える >

永井 問題は2つあると思うのです。そういう問題と、東寮の一部に新渡戸アーカイブスを残していただけないか...ということとは、ちょっと話が別なような気もいたします。大学がこのようななされていることに対して、私たちが「全然ノーだよ」という資格はございませんけれど...

理事長さんは、新渡戸先生のご研究をしていらっしゃるようで、ご著書などはおありになるのですか。

原田 そんな大したものはありませんけど。

永井 私はぜひ新渡戸アーカイブスを作って、新渡戸先生のことを理事長さんに書いていただきたいと思います。別に理事長さんが自分が書いたことを宣伝して、新渡戸を残したのだということには絶対になりませんから。と言いますのは、ご研究でいらっしゃいましたら、茗荷谷の新渡戸記念館、旧邸のところをご覧になりましたか。私も縁があって見ましたら、何も無いのです。これでは新渡戸先生のご研究が何にも伝わらない。花巻とかにはあるようですけど。新渡戸先生は1903年から33年まで茗荷谷にいらしたのだそうです。それなのに何も無いのですよ。そういうことでは、やはり...

湊 それはよくわかります。私が学長に就任して、すぐに言い始めたのは新渡戸先生のことです。それまでは言われていなかった。そしてリベラル・アーツについてもどんどん言って、学報を賑わしているのも、そのポイントですね。東寮、新渡戸記念館も最初に申し上げました。

藤原 ええ、私はそれ、大賛成だって申し上げましたね。

湊 総会（本年6月17日の同窓会総会）で申し上げた時にも、初めはそうしたかったのだけれど、とにかくそれが場所的に、そして経済的に不可能なのです。ここ（東校舎＝6号館）の補修をこの夏にやりましたが、これだけで2億5000万円です。そうするとなかなかできない。そうであるなら私は、ご挨拶の中でも申しましたけれど、本館を新渡戸記念館にしてほしいと。

永井 私は新渡戸先生が作った寮に残すということが...。私、石川啄木旧邸を見に行ったのです。つまらない家ですけど、そこに立って見ると、彼が見た青空とか、足でここを歩いたということが実感できます。寮についても、こういうものがあるということ、何かの形で残していただきたい。お金のことというのは、またこれは大変なことですが、何か捻り出すのは、国のような所ではなくて、女子大のような所ではまた考え方の違うこともあるのではないのでしょうか。そこで絶対に無理だとお決めにならないで、少し気持ちに余裕を持って...

< 老朽化と安全性 >

原田 寮には私も中に入ったり、地下へ潜ったりして、この目で見て来ましたけれど、もう触るとコンクリートがポロポロッと落ちるのです。あれをそのままにしておく...

藤原 表面のモルタルが何かですか。

原田 あれは厚化粧をして...

藤原 その厚化粧の部分が剥げたのではないですか。

原田 あれは本当に危険だと私は思います。

永井 そうですね。でも、専門家の方々の仰るには、まだ大丈夫だという....。

堀地 建物に歴史的な価値があることについては、まったく異存はないのです。それはそれだけの年月を経て今残っているものは大切にしなければいけない、ということはよくわかります。しかし、これをそのまま保存して何にも使わないというならいいですが、そういうわけにはいかないのです。敷地の関係で、あの場所も使わなければいけないですね。使うためには補修をしなければいけないのです。それで、どれだけコンクリートが大丈夫か、今さらに調査を入れております。

耐震設計促進法という法律があるのです。これによると東寮は不適格なのです。体育館も不適格。地震の問題については、ご承知の通り、今の建築基準法は1978年に宮城沖地震がありまして、その時に基準法の考え方が確定したのです。それが今の建築基準法なのです。ところが、促進法というのが2年ぐらい前にできました。さらに厳しいものですが、それは神戸の震災を反映しているのです。そういうふうに法律の考え方、設計の考え方が、ずいぶん変わって来ています。それで文科省からは、特に公共的な建物については、促進法に沿ってやりなさいという指導があるのです。

そういうことが非常に重要な要素なのです。歴史的に素晴らしいということも、いくら言われても、その問題も考えてもらわないと困るのです。

藤原 それでこの問題が起きた時に、参宮橋のレーモンド事務所をお訪ねしました。当時の方で一番古的埜さんという方 この方は定年でお辞めになっているのだけれど、時々いらっしゃっています に設計図などを見せていただきまして、お話を承ったのです。そうしたら「この時代のコンクリートの質は、戦後の高度成長期のコンクリートとは、比べものにならないくらい堅牢なのです」とおっしゃるのです。「コンクリートミキサー車でもってダースと流し込む、ああいうものとまったく質が違いますよ。だから大正期といえども、堅牢無比とっていただいで間違いはない」と、的埜さんはそう仰いました。

堀地 的埜さんは現在の耐震設計に的確な判断をされていますか。

藤原 それとはまた別に、阪神大震災の時に、戦前にできた建物で生き延びているものがたくさんありますよね。それは戦前の建築基準であり、もしかしたらもっと古いものであるのだけれど建っているというのです。それなのに戦後にできたビルが壊れていると。そういうものを何件も専門家の方がご指摘になっています。仰るように、建築事情は確かに年ごとに変わって来ました。ですから、それに合わせれば大正期なんて目じゃないよという感じが、一般にもたれがちですけれど、実は個々の建物に応じて、古いものでも堅牢であるし、新しくても非常に脆弱なものがあります。そういう事実を専門家の先生が仰っています。古いというだけで一律には評価できない。

堀地 それは私もよくわかりますよ。神戸などで、今の耐震基準には合致していないけれど、生き残った建物がある。それはその通りです。それは否定しませんが、今問題なのは、現に基準がありますから、その基準に照らしてこの建物を見た場合には不適格なのです。これはちゃんと

調べてあります。ですから結果として残ったかどうかと、そういう話ではないのです。要するに新しい基準に照らして、それが適格かどうかという判断なのです。

田邊 そうすると、ほとんど同じ時期にできたこの本館とか東西校舎とかは耐震補強をするわけですね。ならば東寮や体育館もその方式でできるのではないですか。

堀地 だから五号館を残すためには、耐震基準を満たすような改修をしなければいけないのです。

田邊 東西校舎、本館、チャペルを、これから何年かかけて毎年夏休みになさると書いていらっしゃるいましたが、それと同じ形で東寮や体育館もしていただければ残るということではないですか。

< 保存活用にかかる費用 >

堀地 もちろん、そうですよ。だから東校舎は耐震の基準に一部不適合なのです。それを補強しまして、そして改修したわけです。だから東寮を残すにはそういうふうにしなければならない。ところがそのためにはお金がかかる。

田邊 どのくらいかかるのですか。

堀地 それは具体的に見積もってみないとわかりませんが。

田邊 見積もっていらっしゃるのですか。

堀地 いえ。それで東校舎は総額 2 億 5000 万。そのうち耐震にいくらかかかっている。

藤原 東寮の解体費が 3 億 5000 万円と聞きましたけれど、解体に 3 億 5000 万円かかるのなら、そのお金を耐震補強のためにお使いになれるのではないですか。

堀地 いや、3 億 5000 万円はかからない。それはどこから聞いたのですか。

藤原 西寮を壊した時にそれくらいかかったから。あれは堅牢無比だったそうですね。

堀地 西寮を壊した時に 3 億 5000 万円かかったのですか。

藤原 いやいや、多分その時の数字から類推なさったのだと思います。西寮解体にいくらかかかったかは、私は聞いていません。解体には相当な金額がかかるはずですね。

堀地 かかると思いますよ。

藤原 相当深く掘り下げてやりますから。だから、これだけのお金をかけるのなら、補強にかけて...

堀地 3 億 5000 万円というのは...。あまりお金のことを言うのは、あれですけど...

藤原 いや、お金のことをおっしゃったから、申し上げたのです。

堀地 そうじゃなくて、3 億 5000 万という、そういう数字を言われるから、その数字の信憑性はないと思います。それはもっと安いと思います。

< 同窓会はなぜ動かないのか >

永井 お金のことは確かにあります。お金をかけても残すべきかどうかというのは、また話が別だと思うのです。それでどうして同窓会は動かないのですか。いくらかだって、全額はできないかもしれませんが、補強のことなどがあれば、同窓会だって動いてしかるべきだと思います。

大学にお金がないことは知っていますよ。ここの同窓会は桜楓会（注3）とは全然違って、私なども話を頼まれて行きますけれど、みんな…。

原田 同窓会がなぜ動かないのか、私にはよくわかりませんが、私が聞いているのは、いろいろな意見があってまとまりませんということ。それから今回もいろいろ話していると、私の耳にもいろいろ入ってくるのです。「話を聞きましたけれど、大変ですね。なんでそんなことに反対が起こるのでしょうか」と。そういう意見が私のところ…。

永井 逆の意見もおありになるわけですがけれど、やはり同窓会が動いていただいて、せめてもの…。残したいという人も半分はいるわけですね。まったくお金がないということだけで、切り捨ててしまうのはちょっと。

原田 お金がないというだけではないと思います。

藤原 そうです。お金がないだけでなく、知らないのですよ。「あそこにそういうものがあるなんて、知らなかったわ」という方や、今回の署名で「え？」って仰る方が何人もいました。「私たちそこに暮らしたのよ」と言うと、「ええっ？」という感じ。

湊 同窓生が4万人いますけれど、そのうち1万人は牟礼の卒業生です（注4）。牟礼を譲渡するにあたって、非常にたたかひをもった1万人なのです。私は1万通の手紙を出しました。その方々の声も聞いています。最後のお別れの会の時に、こういうスピーチがありました。「牟礼の心を心の牟礼に」という題でスピーチをなさいました。その人たちの思いというものが、心の中に。私自身も短期大学から文理へ行った人間ですから、体の半分は牟礼の方に。ですからよくわかります。それを吸収しながら両方の立場を。ある意味では、牟礼を失って善福寺の充実のために献身したというか、捧げたというか、同意をしたということになっていきますから、それを私はありがたく受け取って、牟礼の心を心の牟礼に持って、これからキャンパス整備を進めていくから…と、みんなで話し合ったことがあります。ですから、東寮だけという、それがまた…」

藤原 体育館も。あそこは工場になったり（注5）受験場になったり…。工場の時代をご存知ですね。

永井 私が卒業した後です。

湊 よくわかっています。ですから今、理事長がおっしゃったように、いろいろな意見があります。反対意見だけではなくて、賛成と反対が同じだけおられます。地方へ行ってみてもよくわかるのです。元に戻って、同窓会はなぜ動かないのか。私も同窓生の一人ですが、立場上どっちに加担するということではできません。大学の責任者ですから。ですから、同窓会が動けないという理由もわかります。

永井 同窓会が全然動かないのではなくて、賛成の方もおいでになるといいますから、ここで改めて「これはどうですか」というキャンペーンと、いくらかでも、1000円でもいいから寄付してくださいということは、同窓会でお考えになっていただければと思います。それから今の牟礼のお話は、とてもよくわかりました。だからと言って東寮や体育館を潰してもいいという意味にはならないと思います。

湊 それとは全然違うと思います。

<安全のための動線 ・歴史的ゾーン >

原田 その議論もありますけれど、私は実は1年半前にこちらに来させていただいたのですが、この話はずっと進んでいたのです。進んでいたのですが、最終的にこれを教職員の皆さんから2回、全面的にアンケートを取ったり、同窓会の皆さんにもどうぞと言って意見をいただいたりして、それを管財課の人たちが集約して、何度もキャンパス整備委員会で皆さんのご意見を聞きながらやって来ました。で、この案が出てきた時に、私が一番大変だと思いましたが、学生と教職員の安全問題なのです。

今はこういうふうに建物が建っていますけれど、ここで何かが起こった時に、救急自動車が入れないのです。それがもう建て増し建て増しで来ているでしょう。恐らく永井先生がおられた頃は学生が2000人くらいですかね（注6）

湊 私の頃が千何百人。

原田 今は4000人います。今、学生がお昼などに教室を出て憩う場所もない。そういう状況に置かれているわけです。まあ、グランドへ行けば別ですよ。そういうことを考えて、学生の安全を図って、動線を作ると。それからある種のスペースを作りましょうということが考えられている。そして歴史的なゾーンとしては、この部分が大学のまさにシンボルですので。

皆さん方の中にはレーモンドさんの設計は全部ご破算になってしまったと考えられる方がいらっしゃる。最もシンボルとなる所はこうやって残しましょうと、校門から入った時のあの姿。「凡て真なること」と書かれた本館も含めて、全部残しましょうということがある。

それから木ですけれど、武蔵野の一角を作った森の主要部分は、ライシャワー館とか、外国人教師館として残しましょう。そして残った部分の動線を図りながら、現在の建物も維持しながら、しかし古くなってどうしようもない体育館、それから教室を整理して、こうした形でやりましょうと。あとで模型をご覧いただくと、もう少し立体的に見えますから。

<少子化・大学の競争力>

原田 先ほどもお話にありましたが、少子化になって学生数が少なくなる、しかし歴史的に新渡戸先生 新渡戸先生だけではないでしょうけれど が始められた建学の方針、近代国家で女子高等教育を盛んにして、しかし精神的にも明確な大学にしましょうという、その大学の意義は将来ともあると思います。もっと競争力が 競争力というとおかしいですけど 学生諸君を吸引して、よい教育をする環境を作ると。長い間、その環境の整備が遅れに遅れてきていた。それに対しては今や、牟礼のキャンパスを整理して合体させると。これはあそこの卒業生にとっては大変な痛みですけど、我々の先達がああいう財産を残してくれたのが、今度は処分できた。これは私の前の時代の執行部が一所懸命努力して...

永井 西先生。

原田 西先生もそうですが、その前からですね。そしてついに基本となる財産ができた。これは先達のお陰です。それを使うことによって、このキャンパス計画ができる。これは本当に大事にして使わなければならない。そういう中で最大限考えたのが、十分歴史的なメインを残しましょう、学生の安全を図りましょう、そして将来に向けて新しい皮袋を作ってもらいたいと。

今の学生は昔とは違うのです。近代的にいろいろな要請があります。少子化で学生数が少なくなるという心配はありますが、私はまだまだ本学は競争力というか、吸引力を持てると思う。しかしそのためには整備をしつつ、教職員がいっしょになって、学生のための対応をとらなければ。そうすれば例えば受験戦争に負けても 負けてもというか、点数だけではなくて 本学のリベラルアーツをよしとする人たちが、今高校で点数が悪くて、偏差値が悪いので落ちこぼれそうになっている人たちの中に、素晴らしい卵があるかもしれない。そういう人たちを、新しい受験の合格を決めるやり方で、もっと集めて集めてもらいたい。それから学長にも全国を行脚していただいています。

湊 16回。今回で17回目....

藤原 偏差値によらずに、素晴らしい個性をもっている学生さんたちが来て、この大学の教育環境をよく活かして、よい社会人になっていくと。そういうことを考えますと例えば、東寮の歴史的な遺産というのが、今出来たばかりのピカピカなビルディングよりも、はるかに个性的であり、はるかに歴史的価値があり、はるかにレトロ レトロ感覚というと、ちょっとあれですけど 今の人たちには魅力のある建物になるのではないのでしょうか。だから仰るように、偏差値一辺倒の受験戦争と、新しいビルというのは対応しているのです。

<心とモノの関係>

原田 新渡戸の五千円札が2004年に無くなったでしょ。その時に私はまだ現役で、新渡戸の五千円札を守る会というのを...。そのご縁で湊先生と私はお知り合いになりました。

湊 国連大学でやりましたね。

原田 新渡戸の五千円札を守るために、財務省の理財局長に喝を入れたと、新聞は書いたのです。でも、私はまったく違うことを考えていた。その新聞の取材は、大蔵省理財局長に検事総長が喝を入れて叱ったという記事を書きたい。私はそんなことはまったくありません。その記者が来て、何とかそれを言わせようとして、「惜しいでしょ。何か文句を言ったのではありませんか」とか。

永井 誘導尋問というのが上手いですからね。

原田 私はこう言ったのです。永井さんならわかってくれると思いますが、これは私のある形の偶像なのです、五千円札は、偶像よりももっと大切な心がある。20年間、新渡戸は五千円札でがんばってくれた。私は新渡戸をそこに使ってくれた人に感謝する。20年間、新渡戸さんご苦労様でしたと、そういう会を湊先生とやったのです。それは何かというと、偶像ではないのです、今や。心です。新渡戸の心を残す。

藤原 私等も新渡戸の心を残したいのです。それを申し上げているのです。

原田 いや、その話はわかりましたけれど、心に残すのはモノではありません。私はモノも大事ですけど....

藤原 モノは抛り所になります。

永井 やっぱりモノだと思います。

原田 その残し方はいろいろ、さっき学長が言われましたように、メモリアルゾーンの大切な

所に、残せるために知恵を出しましょうと。

永井 寮の生活でお話をいたしますと、新渡戸先生という方とは、私はお目にかかっていませんが、パーラーに新渡戸先生のお写真がございまして。そこで皆さんがお夕拝をなさるので、キリスト教に触れないでいた方でも、誘われてお礼拝に出たりします。私などはちょっとしか出なかった方ですが。ついこの間、同じ頃の卒業生と他のことで会ったら、「私はあのパーラーでお祈りというものを覚えました。女子大に入るまではまったくキリスト教を知りませんでした。あそこでの生活が、今の私の人生を決めています」と仰るのです。それで「パーラーが、本当に惜しいですね」というお気持ちがおありになる。

それだけではなくて、いろいろ祈りの歴史があるわけです。戦争中はキリスト教というものが敵視されているというか、石原学長先生には特高がついて大変だったらしいです。そういう中で、どうして私たちが祈りというものを考えたかという、生と死というものに直面していた。今は皆さん、明日死ぬなんてお考えにならないと思いますが、我々の時代にはそういうことがあったのです。ですから「人間はなぜ生きるのか」ということを考えて、そして祈りに行った人もいます。そういう意味で東寮の一人部屋というのが、自分達にとってありがたかった。

やはり新渡戸先生が、女の子は一人で思い、祈る場所が必要だと言ってくださったお気持ち、そういうものを形で残す。これを全部残せるかどうかとなると、問題でございますが、何かの形で、こういうことから祈りが始まったということ...。今、日本が一番危ないところへ来ていますよ。でも学生はそれを考えていない。だけどそれを考えるためには、新渡戸スピリットというものの手応えなるものが、何かの形であるといいと思います。

<アーカイブ委員会>

湊 私、本当にそう思います。ですから今、ここがスペースとしてどうしても必要であるならば、何とかして本館を...。日本女子大学は門を入ったらすぐ左側に成瀬記念館がございまして。そこに入ればサッと日本女子大の歴史がわかります。私はここに、東寮の一室も展示される、新渡戸先生のジュネーブの椅子も展示される。

そして今、比較文化研究所の佐波文庫 植村正久先生の関係の文庫 は非常に貴重なのです。東京女子大学しか持っていない文書がいっぱいあります。それが何とも管理が不十分になっていますから、これは早急にやらなければいけません。私は自分自身が歴史屋ですから、非常にそういうことが気になりまして。で、本館がそういうところになればと。

私は今、大学の方にはアーカイブ委員会というのを立ち上げました。それは建物についてではなくて、資料が分散しているのです。資料室とか、図書館とか。それを全部集約して、私たちの大学はどれだけの資料を持っていて、どういうふうな...。それでここも、体育館の中もみんなそうですが、それをアーカイブ委員会できちんとまとめて、そして理事会で取り上げて、充実したものを作っていただきたい。そういうことに反対なさる卒業生の方だってあるわけです。ですから、そういうところを歴史的にしっかり守るために、お力をいただければ嬉しいという気がします。

永井 できればそれを、東寮のあたりにできませんか。

湊 そうできたら、本当に一番いいですね。

藤原 それを最初におっしゃっていました。だから私はそれに、とても賛成と申し上げました。

湊 私もそれで躍るような思いがしたのですけれど。いろいろ、今理事長がご説明されたように、今、4300名の学生をサポートできる建物をどうやって建てるのか、ということになってくると、どうしてもそこは動かざるを得ないということに…。

< 3号館の跡地 >

藤原 例えば今度、3号館というのが壊されますよね。あそこを何とかそういうスペースにすることはできないものでしょうか。

田邊 3号館の跡地はどうなりますか。

堀地 そういう角度を含めて全部、いろいろな角度から検討したプランが整備計画なのです。

< 東寮・体育館の活用・樹木の美しい場所 >

堀地 お話を伺っていて、お気持ちはよくわかるのですが、一方この建物をそのまま残すのではなくて、大学としては限られた敷地の中で、それを活用しなければいけないのですよ。これが問題なのです。ですから例えば、ここに残すものについても、これを活用するわけです。つまり、記念館としてそのまま残すというスペースはないのです。

永井 それはそうです。それはもう結構です。十分にわかっています。

堀地 そのためにはお金がずいぶんかかるのです。かかるのだけれど、それをやろうと。だからここ（歴史的ゾーン）はもう、何としてでもやりますと。そのためには大変なお金がかかるのです。それなら文化財にしなければよかったのではないかという議論もあるのですが、それは建学の精神、今まで守ってきたものをやっているわけだから。ところがここまで（東寮と体育館）やろうとするとね。例えばこの東寮を何に使うわけですかね。

藤原 ですからアーカイブスに。

永井 アーカイブス、いいのではないですか。今、日本女子大のお話が出ましたけれど、日本女子大は確かに成瀬記念館の立派なのがございます。それといっしょに成瀬仁蔵先生のお宅が保存してある。

堀地 アーカイブに使うと。実際はあれを解体いたしまして、その後に体育館を作ろうとしているのです。そうすると体育館はどうするのです。

藤原 実は昨日の夜、私はここに伺っているのです。別に侵入したわけではありません。先生から依頼されて、女性学研究所で話をしてほしいと言われまして、ジャーナリスト志望の学生さんたちのために。これは偶然で、昨日たまたま参りまして、六時頃まで女性学研究所におりました。それで帰りに、暗闇の中に灯りが点っているところをずっと歩きながら　ここはフォレストゾーンではない。体育館と東寮の間の場所で、これも当然壊される所ですけど　なんて素晴らしいのだろうと思いつきながら帰ってきました。

田邊 あそこが東女の中では一番美しいですね。

藤原 大きな木がありますしね。あれはまさに癒しのゾーンだなと思いました。

田邊 安井記念館の前です。ですから、東寮と体育館の3舎に囲まれた、ここが今一番美しい所です。ここを保存して置いて下さると、計画のフォレストゾーンが伸びやかに広がって。

堀地 そのご意見も承知しておりまして、これもさんざん考えました。

田邊 それを聞かせていただけないですか。どういうふうに考えられたかを。

堀地 ああ、そうですか。それは学報をご覧になりましたか。

田邊 はい。私、持って参りました。

堀地 そこに書いてありますが、ここからここへさっき言った動線が伸びまして、ここに新しく教室棟と研究室棟ができるのです。ところが、この一帯にきれいな樹木は確かにあります。これは残すのです。ただある程度、必要最小限のものは切りますけれどね。ただその代わり、この建物の構造を、ちゃんと通り抜けができるような、こっちから見ても安井記念館が見えるような、そういう設計になっていますよ。

藤原 それで昨日、催しが始まる前に、ついでにちょっと新旧両方の体育館を覗かせていただいたのです。そしたら、旧体育館の方では民謡というか、太鼓をたたきながら和服を来て何かやっていました。

湊 明日からVERA祭なので...

藤原 いや、先生がいらして、授業だとおっしゃっていましたよ。それから新体育館の方ではバドミントンをやっていました。それで「なんでこんなにいろいろなことをやっているのですか」と聞くと、「選択プログラムが多彩になっていまして、細切れでいろいろなことをやらなければならない。そのために体育館が二つあると非常に重宝なのです」と伺いまして、ああそうかと思いました。これが一つになってしまったら、却って不便だと思いました。

堀地 いや、だからその両方をカバーできるような、そういう大きさのものを造るのですよ。

藤原 だから、大きくならない方がよいということです。

堀地 そんなことはないです。

藤原 ですから(2つの体育館があるのは)区切りがあって、出入りが面倒なようですが、あれは逆に使い勝手がいいのかな、と思って眺めていました。

堀地 いや、それは...。それで、あれは危ないのですよ、旧体育館は。

藤原 それは補強すれば、ここだって同じ寿命なのですから。危ないと言われれば、ここだって危ないです。

堀地 ですから、それはさっきお話ししたように、そのまま使う場合には耐震の補強をしなければいけない。

田邊 ぜひしていただきたいですね。

堀地 しかし旧体育館になりますと、相当なお金になってしまうのです。古いものを残したいという気持ちはわかるけど、専門家が見れば、これを補強して造り替えるという考え方は、全然経済性を否定しているのです。

< 学部再編成との兼ね合い・ゾーン2m移動 >

原田 経済性もさることながら、これから次の1世紀を考えなければいけない。それを小手先

でちょっとつかえ棒をしたりするだけで、本当にいいのだろうか。

それから今度やっと、学長のリーダーシップの下に、学部再編成の形が見えてきました（再編の内容については、この報告では伏せます）。それに伴って、新しい教室、新しい研究室、それを支えるためのものを造る必要がある。それで教職員の意見をよく聞いたもので、それを全部、この2つの棟に取り込んだ。そうでないと、今までバラバラになっている中で、それから事務の人たちもあっちこっちバラバラでしょ。そういうものを合体して、だから使い勝手も…。つまり、新しい皮袋をつくるということが、私はとても大事なことだと思います。それは今の若い女性に対して、我々の責任ではないかと思います。

昔の懐かしいものはとにかく残して、耐震性を直しながらも置いてくださいと。昔といっしょです。しかし当初、永井さんがおられた頃と、このキャンパスはまったく予想を超えた4000人の学生が暮らしている。その人たちが安全で、快適に過ごせる空間をこれから造っていく。そのために例えば、今のようなグリーン、ここ（フォレストゾーン）はほとんど手をつけなくて残すのですよ。それから当初の計画よりもこちらに（歴史的ゾーンを広げる方向に）何メートルくらいでしたか、動かしまして残せる…。

湊 2メートルくらい。

< 樹木の美しい場所 ・新しい体育館の2階の多目的ホール >

原田 それからここ（東寮、体育館、安井記念館に囲まれた場所）にあるグリーン、さっき素晴らしいと言ったけれど、危ない木がいっぱいあるのですよ。中が腐って、あれが風で折れたりね。危ないのです。そういうことも踏まえて、草木は植え直す必要があるのです。ここにある樹木のほとんど…。ずっとそういう研究をしていらっしゃる先生に聞きましたけれど…。

湊 福田先生（注7）に全部…。

原田 計画的に造られたものではなくて、その時々学生、卒業生、教職員の皆さん方が造っていった（注8）。それをぜひこれからもやっていただきたい。きれいにし直していただきたい。このオープンスペースをぜひ皆さんで活用していただきたい。

この新しい所にも、レーモンド先生が設計の基本的な、打ちっ放しのコンクリート。コンクリートには悪いのですが、本当はそれが素晴らしいということで、もとに戻すということとか。本館のいろいろ木をイメージしたデザイン、ああいうものを随所に入れましょうとか。それから非常にシンボリックなことですが、正門に出ている縦に鉄が走っているだけの門扉は元に戻しましょうと。そういう面で考えられることは全部注ぎ込んで、新しいものに造ろうとしている。

キャンパスを整備するというのは、そういうことではないかと。昔のことをそのまま、学生がこれだけ増え、教職員も増えている中で、単にバラバラに建ててきた建物の中に押し込めるのではなくて、せっかく出来上がった整備計画の中で活かしていこうと。それが私どもの責任ではないかと。ですからぜひそういう…。

ただ、今日のお話はよくわかりました。そういう歴史的なものに対する、特に寮で過ごした気持ち、体育館で過ごしたお気持ちというのはよくわかります。そういうものを一部、体育館の手法などにも…。それから、これも知恵が出るものだなと思いましたが、牟礼のチャペルの残して

いただいたステンドグラスとか、灯りとか、小ホールの多目的に使う所に…。

湊 今おっしゃられた牟礼のチャペルも、そのままどこかに移転する案もあったのですが、それにはお金がかかり過ぎることと、このゾーンを壊してしまうので、それを止めました。体育館の2階に多目的ホールとして、200人ぐらい入って、床も木で、当時のランプもステンドグラスも全部保管してあります。多目的に卒業生も優先して使えるような、そういうものを考えています。

永井 そういうことの中に、今、私どもが考えている東寮のことなどもお考えに入れていただけませんかでしょうか。聞き置くということではなく、多少の理解を示していただけるといい。

湊 アーカイブスの方に、そういうものが保存できるように、私は最善を尽くしたいと思っていますのです。

<アーカイブスを教育に活かす>

田邊 私も成瀬記念館を拝見したのですが、そこの学芸員の方に伺ったら、幼稚園から大学まで、必須科目として教育に活かしていらっしゃる。大学で言えば、1年生と3年生の時に、あそこに来て、自分でよく見て、研究テーマを決めて、レポートを提出して、それが通らなければ卒業できないと。それは幼稚園から始まったいる。幼稚園の時の建物を一部使ってあそこを建てていらっしゃる。

私なども、在学生の頃に創立の時のこととか、精神とか、新渡戸先生や安井先生のこと、それから大正期から戦中、戦後のことですね。何も学ばず、知りもしないで来ました。ただSSマークがあることぐらいは知っていましたけど。今の学生さんはサムシングを知らないということです。

そのようにアーカイブスが教育の元になっているのです。しかもそこには毎年1万人の卒業生が訪ねてくるのですって。それで展示物を見て、「これが歴史的展示物になるのだったら、私のところにあるお手紙も」と全国から集まってくる。ですからアーカイブスは、本館の学長先生とかがいらっしゃる所ではなくて、そういう所とは関係のない所に造るべきではないでしょうか。新渡戸先生がお祈りなされた所に…。

湊 ここ(本館)には、将来、理事長室もなくなります。

永井 でも、それとは別に手触りとか、学長先生はお考えですから。

湊 この場所が広げればできるとは思いますけれど、それができないので、何とか本館にというふうに。それで今おっしゃられたことは、よくわかりまして、私は就任したその年から、VERA祭に「学長講演会」というのを入れて、大学のヒストリー、女性の一生をどう生きるかという話を四回やってきました。ところがそこには学生さんが来られるのではなくて、おじいちゃん、おばあちゃんが来られるのです、ご父母が。それで今年は、VERA祭での講演を断りました。それでVERA祭の翌週の火曜日に、大学のヒストリーと理念を学生に話をします。

そしてこのようなアーカイブを整えますと、博物館学というのがあるのです、本学に。その博物館学の教室等々がこの中に入れるようにしたいです。これは私の考えなのですよ。そして博物館学は実習がいるのです。今、全部外へ実習に出しています。

田邊 成瀬記念館もそれに使っていましたね。

湊 そう、だから実習をここでできるようにしたいのです。そういう構想を、理事会に全部まとめて出ささせていただいて、そこでダメだとは仰らないと思うのですが、応援していただければ嬉しいですね。

藤原 東京女子大学は実学を軽視するという伝統がありますからね。私は教養主義で育てられたのです。ありがたいと思っています。昨日も女性学研究所での話の中で、実学云々ということをお口にされた学生さんがいたから、ああ、今でも、やっぱりなと思いました。

<安全のための動線 ・消防>

堀江 非常に具体的な質問なのですが、先ほど動線のお話をなさっていて、これも重要なポイントだと思うのです。これは消防の方も入ってご検討なさった動線なのですか。例えば消防車ならば、消火栓がどこにあるということも関係があると思うのです。この動線の作り方は消防の方が入って検討されたものでしょうか。

堀地 それは設計管理会社が、そういうことを十分に調査してやったものです。

原田 間もなく始まりますけれど、この辺に新しい集中管理センターができて、すべての安全性をここに集中して管理するという。安全のための装置が十分に...

田邊 専門の方がこの動線をご覧になって、都条例によれば、4メートル幅があれば問題がないので、動線がまっすぐ走る必要はないのだ、とおっしゃっていたのですが...

原田 それはいろいろなことを言う人がいるんですよ。

田邊 でも、4メートル幅でいいということは、敢えてここをまっすぐに走らせなくてもいいということですね。

堀地 どこの動線ですか。

田邊 現在の地図がないとダメですね。今、4メートルの幅がないわけではないです。

堀地 例えば今、消防車が正門から入れないのです。

田邊 今まで問題にならなかったのですか。

藤原 入ったことがないのですよね。

湊 幸い火事がなかったから。

藤原 大地震が起きたら、ここまで消防車は入りませんよ。来る途中で止まってしまう。

堀地 それで、それでは困るからということで、今度は正面のところを少し引っ込めまして、幅を広くして通れるようにすると、配慮してあるのです。それから、ここにも書いてありますように、周囲も動線でちゃんとできるように...。いろいろな安全性のためにやっているのです。

例えば具体的に、去年の善福寺川の氾濫がございましたね。その時に、ここが水びだしになってしまったのです。

湊 本館の地下が40センチぐらい。

堀地 1階も浸水したのです。それは学長の話によると50年前にもあったそうですけれど、だから50年間はなかったのです。しかしそういうことも起こり得る。火事だって起こるかもしれないし、いろいろなことに対する備えという点から言うと、この大学は弱いのですよ。だから、そ

れは新しい目で見なければいけないのです。

それから老朽化ということ。ちゃんと残って綺麗じゃないかというお話もあるのですが、それはさっき言ったように今の国の基準とか。それから建築に関連するいろいろなルールがだんだん厳しくなっているのです。そういうことも…。

<成瀬仁蔵の居宅・安井記念ホールの名称>

永井 そういうことと、残るものをどういうふうに残すかということと、やはりお話が2つあると思いますので、堀地さんがご担当でいらっしゃるから、とりわけここで何かお考えいただく。

これを残すということは、やはり女子大の精神を心だけでなく、モノで残すことも大事なのです。成瀬記念館もありますが、成瀬先生のお住いが、女子大の中に残っているのです。それを消防がいるから…ということ潰すということになったら、これは桜楓会が猛反対すると思いますね。桜楓会というところは少し困るところもあるのですよ。こちらの女子大はそんなにないので、それはよいところでもあるのですが…。

それから福沢先生は三田でお亡くなりになったのですが、何も残っていないのです。ただし福沢先生は非常に大きなものを残して…。

湊 安井記念館は残っています。それからもう一つ、新しく安井記念ホール、24号館という建物を、私が就任してから竣工したのです。その名前を付ける時に、キャンパスの中に新渡戸の名前が一つもない。ですから「安井・新渡戸記念館」にしたいという案もありました。却下されました。今度は、新渡戸を冠した記念館が残ってほしいと思っています。応援して…。

永井 今度こそ何とか…。

湊 …なんだけど、ダメだったら、もうこっちということにして。

永井 ダメとは言えないと思う。例えば2階とか、3階とかいうことはできないのですか。

藤原 今、2階です。

湊 だけど建物をあそこに増やすことは、経済的に私は専門ではないですが…。

堀地 いやいや、それはもう常識です。

永井 何かの形で。

堀地 旧東寮を記念する対応とか、写真とか。それからあそこに碑がありますね。

藤原 あの碑の文章は、私が書いたのです。

堀地 ああ、そうですか。そういうものは残しますよ。

湊 それはちゃんと、こっちのアーカイブの方に。そして部屋も残してほしいと。

堀地 残しますが、建物そのものを大改修してやるということは、ちょっと。

藤原 あれはレトロなよい建物ですよ。

永井 東京の中でも、昔は全部潰しましたよ。今や丸ビルとか残していますね。

<説明の浸透・具体的な情報を>

原田 私は、どうぞ卒業生の皆さん、署名をお書きになった皆さんに、この部分を残しますよ

ということを、ぜひ説明したいのです。

永井 これはもちろん。

藤原 それはわかりだと思いますよ。

原田 いや、どうでしょうか。そういうことも知らないで、署名してくださいと言われた時に…。

堀江 理事長、さすがにそこはわかっています。大丈夫です。ただ、皆様方のご苦勞については確かに不勉強なところはあると思います。我々はみんな外へ出てしまっていますから。最初の話に戻るのですが、確かに我々が要望をする時に、今大学で実際にご尽力をなさっている方々のご苦勞を理解していないところがあるかと思います。それは私たちも理解しなければいけないと思います。ぜひさせていただきたいし、それを知らせていただいた上で、さらに考え直したいと思います。

その時にもう少し具体的に。例えばアンケートをお取りになったとおっしゃった、そのアンケートの結果がどうだったのか。あるいは財政難であると言うならば、建て直したらいくらで、維持だったらいくらで、その差額はいくらだから、維持はとうてい無理と言われたら、みんなも「そうか」となると思うのです。ところが、具体的な数字が出てこないから、もしかしたら無い物ねだりかもしれないけれど、「いや、できるのではないの」とみんなで思う。

お値段を出していただいたら、今日の記録とともに、皆さんにお伝えします。皆さんこうですよ、理事の方々はこんなに日夜努力してくださっている、その上で、私たちどう考えましょうかって。こんどこそそちらの説明を反映した考え方をしたいと思います。そのためにはもう少し具体的なお話を。この学報にも書いてあります。何度も委員会を開いた、アンケートも取ったと。ところが中身が出てこない、そこで何をしたのかわからないので、我々の理解が浅くなってしまいます。ですから、私たちにわからせてください。

湊先生にも、堀地さんにも、あれだけのお返事を書いていただいた。あれだけの手書きするのに、どれだけ時間がかかるかわかります。そのお熱意はすごくよくわかって、あれは仲間の何人かにも見せました。そうしたら「堀地さんを見直した」という方が結構いたのですよ。それはなぜかという、具体的な堀地さんの文字が返ってきたからなのです。

ですからアンケートの結果、あるいは試算金額。それからここに消防が入って動線を検討したのだったら、三菱地所さんとの消防とのやり取り。どうしてもここにこの道路（動線）を通さなければいけないと消防が主張した理由。そういう具体的なものがあれば、我々だって、なるほどともなるでしょう。そうすれば矛を収めて、みんなでもっと協力できると思います。それを納得させてほしいのです。

堀地 でも一番の問題は、東寮をそのままの形で保存したいと、そういうことですよ。

堀江 ええ。ですからお金がいくらかかるか。

堀地 いくらかかるかというのは、まず用途を何にするかですよ。それが決まらないと試算もできないのですよ。

藤原 用途については、いくつか提案はある。

堀江 少なくとも、今のご計画でいくと壊すのにいくらかかるのか。3億円と言ったら、そん

なにかかりませんとおっしゃいましたね。でも、我々は3億と聞いて、「壊すのに3億かかって、2億5000万円で東校舎を直したのなら、2億5000万円で東寮も直したらいいんじゃないの」と思ってしまうのです。だから、3億ではありません、これは1億円あれば壊せるのだと言われれば、ああそうかと、少しは納得がいきます。具体性がなければみんな納得しません。それを出していただくと、ありがたいのです。私たちも、こんなところで押し引きするのは嫌なので、仰るとおりご協力したいのです。そのための具体的な数字を知りたい。

原田 お気持ちはよくわかります。そういう質問は山ほどあります。

堀江 まとめてお答えください。

原田 あれを出せ、これを出せと、そういうことをいちいちやり出すと限りなくなる。

堀江 でも、少なくとも今壊すのにいくらかかるかは、おわかりですよね。

原田 最終的にそれくらいなら出るかもしれませんけれど。

堀江 それだけでも、今日のお土産としていただくと。

堀地 解体するでしょ。実際に限られた財政の中で、解体を全体にしていくらでやるかという、競争入札をするでしょ。それをやってみないとわからない。しかしだいたいこのくらいと、そういうことは言えますね。しかしそういうことを言うと、いろいろな情報で業者なんか知られると、談合という問題があるでしょ。ああいう問題になってしまうのです。

< P C B の処理 >

原田 今、物置みたいに使っているところに P C B を保管しているところがあるのです。

藤原 P C B ?

堀地 P C B って知ってますでしょ。

藤原 もちろん、知っていますよ。

原田 どこにも置けなくて、それも処分しないと。

藤原 東寮の中にですか。

原田 タワーの下に入っている。

藤原 それは存じませんでした。

原田 そういうことにどれだけお金がかかるか。

< 文化財を残す世の中の流れ >

永井 全部新しくする方が確かにあれでしょうけど、例えば銀行倶楽部が形だけでも残ってよかったなあと思いますし、丸ビルでも、第一生命も、あれはお金がかかっているのです、残すというのは。しかし、何かの形で残すという流れもできておりますし、その中で東寮なり、体育館なりももうちょっと考えてみようかなということができましたら...。それで無くなってしまったら、誰の時に無くしたの...というような。

原田 西寮の時にはそういうことはなかったのですか。

藤原 あんまりなかった。(注9)

永井 なかったですね。あっという間に壊されてしまいました。だからこそ東寮は残していた

だきたいという気持ちがある。私も文化財の保存とか何とかで、五勝五敗なのです。奈良の長屋王の遺跡ですね。あれを残すべきだという運動をしたのです。私はしていませんけれど。それなのにそごうの、金がここにはかかっているのだからということで、保存できなかった。そうしたらそごうが潰れまして、「長屋王の祟りだ」と、みんなが…。それは冗談ですけど。

桃井 ちょっと時間が来ました。後の会のメンバーもそろっていますので。

<今後のこと・シンポジウム>

桃井 それでいかがいたしますか、藤原さん。今日はこれで終わり。また改めてやりますか、日を設けて。

藤原 はい。お願いしたいですね。それで私どもが考えているのは、こういうことをもっとオープンに、我々だけではくて、学生さんとか、外部の方とかを交えたシンポジウムを開いて、そこでみんなでディスカッションをしてはどうかと。そういう提案を持ってきたのです。皆さんの日程を…。

桃井 これはいただきましたね。

藤原 この間お送りいたしました。メンバーと外部の方々をお願いして…。学内でそれを開かせていただけないか。そして大学からも出ていただいて、いっしょに話し合いができないだろうか、ということで持って参りました。

永井 学生の方に、そういうことがあるということを知らせなければいけないと。

原田 検討させていただいたと思いますが、基本的にはキャンパス整備計画は一応決定したことです。反対のお気持ちはわかりますよ。いろいろな意見が出ていることについて、改めてここで賛否を問うて、研究会を学内でやるということについては、私は責任者としてできないと申し上げたいです。

湊 教授会もこの路線で、研究室の数とか、平米とか、これも全部先生方が…。

永井 もうお決まりになっているということは、よくわかりますけれど、そこにプラスアルファということを考えていただければと思います。

湊 東寮を残しなさいということになると、また根本から先生方が…。

堀江 でも、これから学部を変えるわけですから、根本から考え直すということも…。

藤原 ないことでは、ないですね。

原田 そのためにも議論をやっているのです。

田邊 その特色は何になるのですか。キャッチフレーズとか。

原田 それは後で議論して。

湊 次の委員会が待っているのです。

原田 お疲れさまでございました。

永井 結論的にはどういうことをございましょう。またお話し合いができるということで。

原田 ちょっとまた検討しますけど、今のような会議だと、いくらやっても平行線だと思おうのです。

永井 平行線だと思いますが、多少は何か。

原田 今、拝見すると、学外の方を巻き込む社会運動になっていますね。

永井 いや、社会運動というほどにはなっていませんよ。本当にやるつもりだったら、例えば私は瀬戸内晴美さんの手紙を持ってきていますけれど、これは私信ですからお見せするわけにはいきませんが、文化勲章もらいたてのホヤホヤですから、そう人たちがワッとやれば、何でもできるかもしれない。が、そういうことはやりたくない。

原田 私もやりたくないです。

永井 ですから、もう少し何かご厚意をいただけるかどうか。例えばここで多少の理解を示したという結論でよろしいか。まったく理解の余地がないのか。

原田 理解はずいぶん進みましたよ。

永井 お互いがよくわかりました。

原田 それで大正解ではないでしょうか。私も理解させていただきました。

永井 私も理解させていただきました。さてその先に、動きとしてはどういうことになりますでしょうか。次の機会ということは、何かご提案があるかどうか。

原田 こちらがご提案するかどうかは別として、また今日を踏まえて、何かご提案があったら聞かせてください。

藤原 では、シンポジウムについてはノー。

原田 学内でやることについては適当ではないと、私は責任者として。

永井 外でやらせていただくことは、別にこれは学校の承諾を得るということではございません。

田邊 ぜひどなたかに説明に来ていただくことはできないでしょうか。つまり大学の立場をぜひ。私たちが知らせるというのではなく、大学の方からご努力いただきたいということもあります。

原田 ですから、そのパネリストの中身とか、それも含めた上で検討させていただく。

桃井 ただいろいろなやり取りは、何かあれば私の方にご連絡ください。で、答えるべきことがあれば、きちっと答えますので。

田邊 パネリストの案をお渡ししていますけれど、そこにお名前をどなたか書いてよろしいですか。

桃井 今の段階では、大学から誰が出るということとはできない。

田邊 お願いしていますということは。

桃井 ただその日に行くということは確約できない。

堀地 本当に話し合いをしたかったらそういう場はダメですよ。

堀江 私たちは建築家の方からも、大学側と喧嘩しないで、仲良くいっしょにやっていかなければ、話は絶対に成就しないと言われていました。私たちも「もちろんです」とお答えしています。だからその辺の気持ちは同じです。理事の方々が女子大を思う気持ちと、我々が思うと気持ちと、思う気持ちは同じ。ただ具体的な方向性が違う。

桃井 これだけマスコミ関係にも取り上げられて、書きぶりについては、私たちから見れば違う書きぶりもされているようなことを伺いますので、全然知らない方達も目にすることで、そ

ういうものが出ていくということについて、大学は…。現役の学生に対しても非常に不安を覚えさせるようになりますので、そういうことがないように願いたい。

永井 いや、世の中はそうですよ。そうでないと…。

堀地 それから、学内ではみんなこの案を了解しているのです。それは大変いい案ではないかという意見なのです。それを「いや、あれはおかしい」と言われても、大変ですよ。だから我々も非常に考えてここまで来たつもりです。

藤原 必ずしもニュアンスは一致していませんね、いろいろな方のご発言を伺っていると。ああ、ごめんなさい。お引き止めしてしまって…。

注1) 創立(1918年)学生数84名。善福寺移転(1924年)学生数247名。善福寺キャンパスの学生数は、1969年度に2174名で、2000名を超えた。同年の牟礼の学生数は1157名。1997年キャンパス統合により、善福寺キャンパスの学生数は4262名となる。(『東京女子大学の80年』164、165頁)。善福寺キャンパスは、キャンパス統合以来10年間ずっと4000名以上の学生数。

注2) 毎日新聞・2006年8月10日付朝刊・22面「東女大寮解体へ」(前略)同大には、レーモンドが設計した礼拝堂・講堂などが9棟あり、うち7棟が98年に国の登録有形文化財になった。旧東寮と、ともに解体予定の体育館は、整備計画があったため登録されなかった。(後略)」。最近では、讀賣新聞・2006年10月31日付朝刊・17面「女性史の記念碑 どうなる?」(前略)…しかし旧東寮(5号館)と隣接の旧体育館(13号館)は整備計画を見込み、大学が文化財指定を申請しなかった。(後略)」。

注3) 日本女子大学の同窓会。

注4) 全卒業生数は50,490名。うち牟礼の卒業生は13,422名(短大11,564名+現文1,858名)。ただし現在連絡が取れる人数は、全体で約4万人、そのうち約1万人が牟礼の卒業生。

注5) 1944年6月から敗戦まで、体育館は岡田乾電池株式会社の学内工場に転用された。(『東京女子大学五十年史』146頁)

注6) 永井さんが入学なさった1941年の学生数は491名、1942年には752名、1943年には832名、卒業なさった1944年には645名。(『東京女子大学の80年』164頁)

注7) 東京女子大学名誉教授の福田一郎先生(生物学)。

注8) 学内の杜の基礎を造ったのは「杜の会」という学生グループ。1928年、石幡五郎先生が授業中のお散歩で、大講堂が建つ前の、もと田の畦道だった場所に生えていた六本杉の根もとの辺で、空を仰ぎ「この学校内に森を造りたいものだ」と漏らした。それがグループ結成のきっかけとなった。杜の会は1928年から10年間植樹活動を展開し、その目的を一応達成した1938年に解散した。その間、英専の学生がシェイクスピア・ガーデンを、国専の学生が万葉園を計画した。解散に際して、万葉園の近くの藤棚の下に石のベンチを設け、石幡先生の発案で、安井てつ先生の筆になる「杜をして語らしめよ」の銅板をはめ込み、記念とした。(『東京女子大学五十年史』91・93頁) その後も植樹は折々行われた。1994

年からキャンパス統合に伴う建築計画が進められる中で、緑を残す要望が学内に強く、卒業生の署名運動もあって、建築案の見直しが行われた。しかし南側の林やシェイクスピア・ガーデン、スロープなどが失われた。(『東京女子大学の80年』155頁)

注9)この件については調べないと正確なことは言えない。ただし『東京女子大学東西寮六十年』に隅谷三喜男学長(1983年当時)が寄せられた序文中にはこう記されている。「新寮それは楓寮と呼ばれることとなったは、相変わらず一人部屋で、八四年四月に開寮の予定である。当初は新寮建設後東西寮は取り壊す計画であったが、その後色々と考慮して、東西寮の何れかと中央のボイラー室とは、当分保存することとした。それは旧東西寮在寮の方々の思い出のためという点もあるが、前述したように、日本の建築史上記念すべきものであること、生活の場としては寿命が来たが、多少の補強工事をすれば他の用途には使用可能であるという、建築専門家の助言を生かして、これを学生のサークル室として改造・利用しようとするに至ったからである。それに伴って残存する建物の一部を旧東西寮の面影を残すものとして保存したいと考えている。」